

安藤昌益にみる自然の一なること及び方法としての却け

——否定神学との比較を通して——

實川 幹 朗

昌益の語り口

安藤昌益は江戸時代の中期にあって、荻生徂徠、新井白石、本居宣長、石田梅岩などと時を共にしながら、その思索活動は、少なくとも表だっては他の思想家たちとほとんど没交渉のまま過ぎた。昌益の弟子であった神山仙確は、稿本「自然真営道」の「大序」に注釈を書き入れ、「良子（昌益の号である良中を指す…筆者註）に師無く弟子無し」と記している。もとより何者といえども己れの思想のすべてを、全く先人の影響なしに培うのは無理であらう。近頃では、安永寿延氏により、曹洞禅ことに縁起思想の影響が論じられている。⁽¹⁾しかし昌益自らは己れの思想を他の立場から借りたとは考えていないし、あまつさえ彼は儒教、仏教、道教その他を、また江戸時代の社会体制を鋭く攻撃し続けるのである。

る。

思想的観点からの影響関係はどうあれ、昌益自らが己れの語る言葉を、他ならぬ自然そのものから導き出したと考えていることと、いやむしろ自然そのものが語っているのだと考えていることは、彼の思想を考える上で大切である。さらに、昌益は当時の日本に見られたほとんどあらゆる思想、制度を、またそれらに与る人物を批判し、非難し、攻撃する。例えば「聖人出でて、耕さずして只居て、天道人道の直耕を盗みて、貪り食らい、……釈迦出でて、欲心の迷いを足し、心欲、行欲、ますます盛んにして、世は聖人乱し、心は釈迦乱し、……」⁽²⁾といった具合である。

こうした構えは、わが国では皆無とは言えないにしても、希であらう。今日に至るまで、哲学的論争はわが国では盛んとは言えず、論争があったとしても、大方は外来思想の解釈論争であった

り、それらの代理戦争だったりする。昌益が自らの立場をのみ持み——彼本人に言わせれば自らの立場ではなく、「自然そのものの立場」となるに違いないのだが——体裁も構わず強い言葉で、その激しさが時として勢いにまかせた悪口かとさえ思わせるほどの語りをあえて行なったことは、彼の主張の中身を別としても、それだけで注目には値すると言えよう。

書物が著わされるとき、そこに盛られた中身は、主題の選び方、集められた証拠、論証の筋道の確かさに尽きるわけではない。私たちは語りの構え、文体のなかにも、あからさまに語られた言葉を補い、そこに盛りきれない作者の隠れた意図を探ることが、できるのではあるまいか。

アメリカの精神分析家ウィルヘルム・ライヒは、「患者が〈どう〉話すかも、患者が〈何を〉話すかも、解釈の材料として同等の価値がある。」と語っている。もとより私はここでライヒの方法である「性格分析」を昌益について行なおうというのではないし、彼の技法に無条件に賛成なのでもない。ただ、わが国に希な仕方である昌益の言葉の解釈に臨んで、この語り口の鍵を軽んずるわけにはゆかないと指摘しておきたい。

「否定神学」の方法

この昌益の考え方に比べるべきものとして、ここではいわゆるディオニシウス文書を選んでみた。超越的存在である神に、あら

ゆるこの世のものの徹底した否定を以て近づくという「否定神学」の代表的著作である。否定する点においては昌益よりなお徹底した性格によって貫かれているとも言えよう。

この文書は、使徒パウロの説教を聴いてキリスト教に改信したアテナイの裁判官ディオニシウスの著作とされ、中世を通じて新約聖書に次ぐ権威を認められていたものである。ただし著者の真偽については、この文書の世に出た西暦紀元六世紀頃からすでに論争があり、ついには一九世紀に至って、著者はディオニシウスではないと結論された。しかしこのときはすでに、この文書が千年余りに亘ってキリスト教とヨーロッパ文化とに絶大な影響を及ぼした後であった。「否定神学」はかのトマス・アクィナスなどにも受け継がれ、ヨーロッパ思想の中のひととき大きな潮流となっている。今日この文書を読み返すと、理性の適用の限界、存在と存在者の区別、肯定と否定の総合、内在と超越の関係、象徴的表現など、近代哲学の取り組んできた問題のほとんどが先取りされていることに驚かされる。

新プラトン主義の影響を色濃く見せるこの文書の中で偽ディオニシウスは、世界の創造の原因に一なるものを置き、すべてをそこから流れ出させる。したがって、この世のあらゆるものはその一なる神の何ものかを負っており、神を象徴的に表わしていることになる。それは「円の中心点が円に含まれたすべての直線によって分有されており、また印章によって作られた多くの捺印が、

原型である印章を分有しているようなものである。⁽⁴⁾ ここまでの考え方は「肯定神学」と言われる。

しかしながら、「いかなるものも神には触れることができず、分有する側のものは、いかなる形においても神と混合し交わることができない。」この世のあらゆるものは、どの一つをとってみても、または全てを合わせたとしても、神そのものにはならないし、神と触れあうことさえ叶わない。「万物の原因である神の非分有性は、万物を越えている」からである。⁽⁵⁾

否定神学の始まるのはここからである。神がいかにかけ離れた（超越した）ものだろうとも、我われにもそこへと迫る何らかの手だてが無ければ困る。もとよりこの世を渡る普通の行き方は使えない。「我々が我々のやり方で我々を越えたものを捉えようとするとき、そして感覚的なものに包まれながら我々のやり方で神なるものにあえて近づく時、我々は誤りを犯す。それは神のこと、語るべからざる言葉を、現象界のあり方に従って追求するからである。」⁽⁶⁾ この、カントの「純粹理性批判」の香りをも漂わせる一節はしかし、偽ディオニシウスの否定の矛先が、カント的な人間中心主義を越えて、私たち自らの現に生きている在り方そのものへと向けられることを示している。神にまことに近づくためには、この世の全ては否定されねばならない。「神は一でもなく、三でもなく、数でもなく一性でもなく豊饒でもなく、その他存在するいかなるものでもなく、彼らから認識される何ものの

もない。⁽⁷⁾ この一見拒絶と荒廃をもたらしそうな否定の徹底が、真の根源へと至る道だと偽ディオニシウスは言うのである。

昌益の「ヒトリスル」

自然と一に留まらぬ互性

先に触れたとおり、昌益によれば、この世の全ては、人が邪な拵えを為さないかぎりには、ただ一つの自然の、おのづからなる働きそのものである。「転定（てんち）、人、物、あらゆる事、理、微塵に至るまで、語、黙、動、止、ただこの自然活真の営道に尽極す。」⁽⁸⁾ デイオニシウス文書において全てが一なる神から流れ出たのと同く似ている。昌益は自然をヒトリスルとも説かせている。自然から産まれたものはすべて、異なって見えても一つの働きである。ただし、世のものごとと自然との係わりは、捺印と印判との間柄のような写し、「象徴性」のそれではなく、ものごとこそ自然そのものである。西洋風の宗教学の立場からすれば、「汎神論的」と言えるかもしれない。

しかしもちろん、何から何まで自然という言葉でただ塗りつぶしてしまふのでないことは、次の言葉を聞けば分かる。「一に住せず、二を出ださざる活真、自感、互性の妙道を知らず、一貫を論する者は偏惑・妄失なり。」⁽⁹⁾ 全てがただ一つの自然の働きではあっても、ひたすらそこに留まろうとするのみではかえって偏った立場に囚われたことになる。一に留まるのではなく、かといっ

て二以上の異なったものの対立の中に迷い込むのではない。そこに昌益の思想の中軸をなす「互性」の眺めが開けてくる。

互性とは、二つ以上の一見異なり、独立しているかに見えるものごとが、まことは自然の一つの「自感」(自ら働くこと)の別の姿であり、互いに相手方を俟ってはじめてこちらが成り立つという仕組みのことである。昌益はこう述べる。「これ転定にして一体、日月にして一神、男女にして一人……転を去れば定も無し、定を去れば転も無し、月を去れば日も無し、男を去れば女も無し、一切、二儀と見ゆるは、皆この如し。ゆえに自(ヒトリ)然(スル)なり」¹⁰。

昌益は他の箇所でも「男女」と書いて「ヒト」と振り仮名をしている。これはもはや単なる相互依存ではない。例えば独立した人格の男女が互いに自立を尊重しつつ協調すると言った事態ではない。男が男であるのは女がいるからであり、しかも男の本性は女の許にこそ発揮される。その逆も然りである。あるものは他のものによってのみ成り立ち、しかも、あるものの本性は他のものの許にこそ現われる。裏から言えば、あるものの掌る働きは、まこととは他の何ものかの本性の現われなのである。男女、転定、日月などの組み合わせは無数に見あたる。

しかし、互性の係わりは一对一の二つ組の内で閉じられてしまうのではない。

「一念の機ざしは乃ち五行の一感なり。……木の発生は始めに似

れども、木のみにあらず、木中に五行をそなひて一連の機ざしなり」¹¹。ここでは自然の働きの具体化である五行の働きの互いの係わりを説いているが、木から始まる「木火土金水」の順序を否んでもどれも対等の位置に置き、しかも一見ただ木一つのみと見える中に、五行のすべてが含まれ、働きを現わしているというのである。この世の全ては互性の内にある。しかしなかなづくの互性を最も鮮やかに示すのが——それは私たち人間、いや男女にとつて最も鮮やかであるに過ぎないのだろうか——人の体である。「耳は聞くことをつかさどり、聞くの妙徳性は目よりす。耳は水気、目は木気の互性なり。……運回の木気、目の木気に感合し、木気より聞くの妙徳性を為す。ゆえに、活真に聞くときは、聞く内に七門の妙用伏して、聞くの一映と成りて、転定の風音、人物の言語、……一切の声、耳穴虚空の外に浮かべて聞くなり」。

昌益は医者であり、彼の思想は基礎・臨床医学でもあった。このやや難解な一節は、人の体の感覚、知覚の働きを、彼独自の五行思想にのつとつて解いたものである。試みに、私なりに言い換えてみよう。「耳の役割は聞くことだが、聞く働きの大本は目から伝えられている。耳には水の気、目には木の気が現われているが、それらは互性の間柄にあつて、独立してはいない。……世界をめぐる木の気が、目の木気と働きを合わせて、そこが聞く働きの大本となる。だから、自然の働きのままに聞くとときには、聞くことの内に他の全ての感覚のまことの働きがこもつて、それに

よってはじめに聞くという働きがそこに現われ出るのである。すると、世界のあらゆるものごとの音、言葉、……すべての声が、耳穴の外に浮かんで、すなわち世界の中から聞こえてくる。」

人がこの世のものと向き合う時には、何か一つの感覚器官だけを使って、その感覚だけを追うことは決してない。例えば音を聞くとき、私たちはただ音のみを聞くのではない。聞こえる音を出す物は必ず見える。私たちは見える物を聞いている。もちろん暗闇であるとか、どうしても回り込めない衝立が視覚を遮ることはあろう。しかし私たちは現実の見えるを遮られても、音の導く視線を物に向ける。もとより、音の聞こえは見えのみに繋がるのではない。他のあらゆる感覚が、現実の像を結ぶと否にかかわらず、音の中に込められている。エンジンのわずかな音の変化が、熟練したパイロットには飛行機と乗客の命の危険を——おそらくは激しい痛覚をも含んだ——情報を伝えるかもしれない。もちろんこの場合、大切なのは、いま表に現われているわずかな音の変化ではなく、その中に込められている別の感覚の方である。

人は人として世界に向かうのであって、個々の物理情報を受容するセンサーの束なのではない。自然としての世界が一つであるように、その自然そのものである人もまた一個のまとまった者（お好みなら「有機的全体」とでも言って構わないが）としてのみ振るまう。さらにその一個の者は、他者と対立しつつ一個であり続けるのではなく、例えば彼が男であるなら、もう一人の女と

ともに一個の男女なのである。言うまでもなく、互性の繋がりはここでも終わらない。同じようにして次々と拡がり、ついに自然を包むのである。¹³⁾

互性を破る者を却ける昌益

昌益が非難攻撃して止まないのは、自然のこうした互性の在り方に、「妄失」「二別」「私」「妄偏」「互性の備わりなき偏惑」「偏知」などを持ち込もうとする人びとである。昌益は勧善懲悪の人のようにも映る。しかし、まったくその逆なのである。昌益の立場からは、悪と異なる、つまり互性に従わぬものとして善を立て、後者のみを勧めるという構えこそ、最も誤った行き方となる。「自然の道は、善惡にして一物、一事なり。ゆえに善を去れば悪も無し、惡を去れば善も無し¹⁴⁾」。善は惡とともに産まれ、惡は善とともに産まれる。だから、もし善を勧め、この世に満たそうと試みるなら、惡もまた等しく成長して恐ろしい有様が繰り広げられるであろう。「孝の名を立つる故に、不孝の罪あり。慈の名を揚ぐる故に、不慈・惡の罪あり。……この故に父子の間に敵味方起り、乱を為し、父を殺し子を殺し……¹⁵⁾」というように。たしかに、善や正義の名の下での殺しあいを、私たちはいやと言うほど見てきたし、現に見つつある。

善を求めないなら昌益は何に向かって進んでいるのか——思わずこう訊ねたくなってくる。何をめざして、何のために——こう

言ってみると、いわゆる「目的論」の観点もここに絡んでくることに気付く。何かを目指す、到達点に向かって進むという構えが、昌益の営みを描き出す枠組みとなり得るかどうかが問われている。偽ディオニシウスなら、この点ははっきりしている。彼は、我われとはすっかり異なる神、たとえ象徴的には繋がっているとしても、我われそのものとはいささかも出会い重なるところのない神へと、我われとこの世界への全き否定を重ねてひたすらに上昇しようとする。完全なる神には、私たちの、肉体、感覚はもとより、知性すらも、その不完全な在り方ゆえに届かないのであるから、それらは否定されることによってのみ神へと近づく。いわば否定で組まれた無限の階段を上りきった魂のみが、最後に神と神秘の合一に達する。もちろん、このかけ離れた神は、完全なる存在であり、全き善でもある。この世のあらゆる者が、存在を持たぬ者さへもが、この目的に向かって進むというのである。⁽¹⁶⁾

昌益の場合には、非難、攻撃の向かう相手は限られている。まず善悪、身分の上下、貧富など、互性の係わりに背こうとする区別を、すなわち「二別」を作ろうとする人びとに向かう。さらに男女、転定、五行など、もともと互性に従って一体となっているものの中からどれか一つだけを取り立て、それだけをとさら優れた、大切なものと取りなそうとする動き、すなわち「偏惑」「偏知」「盗む」「貪食」などの偏りに向かう。そして、文字や貨幣など、もともとヒトリスル自然の内に無かったものを拵えよう

という行ない、すなわち「作言」「偽談」「欲心」「乱惑」などに向かっているのである。

昌益はもちろんここで善を産み出そうとしているのではないが、かと言って悪を亡ぼそうとするのではない。それは悪を懲らすのではなく、「失り（あやまり）」「妄失」を止すという構えである。これを描くのに、先ほどから私は「批判」「非難」「攻撃」などの言葉を用いてきた。これらはいずれも昌益自らの用いた言葉ではない。もっぱら通じのよさを慮って使ってきたのだが、正しくは昌益には失礼なことだった。彼は自らの構えへの、孔子や釈迦を誘って己れを上を立てているのではないかとの問いに、次のように答えている。「上下二別無きの言いは、聖人を誘ふに非ず。自然活真、互性の妙道を見すのみなり。」すると問うた者は泡を吹いて去ったという。⁽¹⁷⁾

稿本「自然真営道」第二十四は「私法世物語」と題され、鳥獸、虫、魚がそれぞれ集まり、自分たちの暮らしぶりと人の世とを引き比べる。ここでは弱肉強食や上下関係の厳しさが主に採り上げられるが、昌益は鳥獸虫魚を悪者として描くつもりではなく、人でありながらあたかも鳥獸虫魚であるかの如く生きる者たちを却けようとしているのである。先の問いを發した者も、咎められるわけでもなく、昌益の弟子になるわけでもなく、ただ去っていった。鳥らは自然から産まれたのであり、非難さるべき者でも否定さるべきものでもない。人の在り方は人へ、鳥の在り

方は鳥へと退き納まるべきだというのみである。しかも、それらの在り方はまた各おの互性の間柄に立つのだから、他と比べて限界を定めるという「批判」が為されているわけでもない。

昌益は、その調子がいかに激しかろうと、非難や攻撃をしようとしたのでも、批判を試みたのでもない。自然の有様を明らかにするために、偏りを押し戻し、誤ったところへ出てきた者をもとものとありかへと却けるのである。自然の中に納めようとすると言ってもよい。

言葉の激しさと一なることとの繋がり

昌益が激しい言葉を発するのは、どこまでも私たち自らを含む自然の内に留まろうとするからである。見かけの激しさとは裏腹に、そこには否定も非難も批判もない。かといって、これらと対立、「二別」する肯定があるわけでもない。こうしてみると、一見似ているかとも思われた昌益と偽ディオニシウスとは全く違った向きに歩もうとしていることが分かる。

偽ディオニシウスは自然を否定して、そこからかけ離れた徹底的な外部を目指す。彼にとって自然は、唯一の神の姿の全てを負っているとは言われても、否定を重ね抜け出してしまふべきものなのだから、いわば神の抜け殻であり、本来どうでもよいのである。否定の言葉に昌益ほどの激しさが見られないのも、その必要がないからではなからうか。こうした構えは、機械的身体より

も精神を重んじたデカルト、法則に従う現われの世界としての自然よりも「ものそのもの」としての人間を重んじたカントなどの、西洋近代哲学にも通じてゆく。さらに、人間が観察し操作する客観的自然という、近代科学の世界観もこの仲間である。人間は自然の中から文明を創造して外部に出で立ち、自然を人間に奉仕させようとする。ハイデガーがいみじくも描いたとおり、自然の全ては人間の手段となる道具として、人の手許に差し出される。そこにはすでに神の姿はないが、それはもしかすると、かの神秘的合一がもう実現したからなのかもしれない。

昌益はヒトリスル自然を語り、偽ディオニシウスは、究極の一なる神を立てる。一なる神は万物の理想であり、目的であり、全てを産み出す原因である。しかし、理想には現実が、目的には手段が、原因には過程や結果が対立する。偽ディオニシウスの一は、二元論に導く一である。すなわち、限りなく異質な二を産み出し、かけ離れた相手へ向かって常に抜け出してゆく一である。

一方の昌益には、自然から抜け出して行く当てはない。なぜなら自然は、合一すべき理想でも、到達すべき目的でも、遙かなる原因でもなく、始めから自然自らであり、既に私たちそのものであるからである。二を産み出す唯一の原因ではなく、二と見える者たちが、互性によって既に一なのである。昌益の自然はどこまでもヒトリであり、彼の言葉の激しさは、人の心を揺さぶり自然を目覚めさせるにすぎない。最後に少し「文学的」になることを

お許し願えれば、二つと無い自然の内をいつまでも響き続ける、自然の声のこだまなのである。

- (1) 安永寿延：「安藤昌益 研究国際化時代の新検証」1992 農山漁村文化協会
- (2) 安藤昌益：稿本「自然真営道」第25 真道哲論巻（「安藤昌益全集」第1巻 p.269）農山漁村文化協会 昭和57—以下「全集」と略す
- (3) Reich, Wilhelm: "Charakter-analyse: Technik und Grundlagen" 1933 邦訳 小此木啓吾「性格分析——その技法と理論」p.61 1966 岩崎学術出版
- (4) Pseudo-Dionysius Areopagita: "Corpus Dionysiacum" 1990, (Beate Regina Suchla) Walter de Gruyter Berlin, New York 邦訳 熊田陽一郎「キリスト教神秘主義著作集」第1巻 第3部2章50節
- (5) 同：第56節
- (6) 同：第3部7章301節
- (7) 同：13章452節
- (8) 安藤昌益：稿本「自然真営道」大序巻（全集第17巻 p.9）
- (9) 安藤昌益：稿本「自然真営道」第25 真道哲論巻（「安藤昌益・佐藤信淵」日本思想大系45 岩波書店 p.346）
- (10) 安藤昌益：刊本「自然真営道」巻一（同 p.21）
- (11) 同：p.23
- (12) 安藤昌益：稿本「自然真営道」大序巻（全集第17巻 p.51）
- (13) このあたりの議論は、世界を「身体図式」として捉えようとしたフランスの哲学者メルロ＝ポンティ（Merleau-Ponty:

"Phénoménologie de la perception" 1945 Gallimard, Paris など）や、ドイツの医学者であるヴィクトール・フォン・ヴァイツェッカーの、環境と人間との係わりを知覚、運動の各要素を貫く統一的な一つの形として捉える理論（"Der Gestaltkreis-Theorie der Einheit von Wahrnehmen und Bewegen" in "Viktor von Weizsäcker Gesamte Schriften" 4 Suhrkamp 1987 など）にも通ずるが、ここで触れるゆとりはない。

- (14) 安藤昌益：稿本「自然真営道」私法儒書巻二（全集第3巻 p.318）
 - (15) 同：私法儒書巻三（全集第4巻 p.77）
 - (16) 「感覚が感じ知性が悟ったいっさいのもの、在るものと在らざるものすべてを捨ててしまいなさい。そして可能な限り、存在と知識すべてを超えたものとの合一に向かって知を捨てた不知の形で高められるように、なぜならあなたは自分自身を含むすべてのものから、絶対的に完全・純粹に離脱することによって、すべてを捨てすべてから解放され、存在を越えた神の闇の光輝にまで高められるであろうから。」Pseudo-Dionysius Areopagita: 同前第4部1章1節
 - (17) 安藤昌益：稿本「自然真営道」大序巻（全集第17巻 p.37）
- （じ）かわ・みきろう、哲学・臨床心理学、
姫路獨協大学助教授）